

## ヨーロッパ・オペラ鑑賞ツアー



沖縄県公務員医師会 安次嶺 馨

コロナパンデミックの影響で、中止や規模縮小を余儀なくされていたヨーロッパの音楽市場も、ようやく活況を取り戻してきた。2022年の夏、3つの音楽祭を鑑賞することができた。オーストリアのブレゲンツとザルツブルク、それにドイツのバイロイトの3都市を、2週間かけて旅した。私にとって、4度目のオペラ鑑賞ツアーであるが、今回は特別な旅となった。今回の旅行の企画者はフルート奏者の渡久地圭氏で、7人の小グループの旅であった。彼はドイツの音楽大学を卒業し、ウィーンなどで10年以上研鑽を積み、現在は沖縄で「ビューロー・ダンケ」という音楽事務所を主宰している。

### ブレゲンツ音楽祭

ブレゲンツ (Bregenz) はアルプス山脈の北麓にあるボーデン湖畔に位置する。オーストリアの西端にあり、湖を隔ててスイス、ドイツと国境を接する人口28,600人の小さな街である。ブレゲンツ音楽祭は、1946年から開催されていて、最大の目玉はボーデン湖の水上に設営した舞台で行われる湖上オペラである。

湖上オペラとは、例えていえば、野球場の内野グラウンドがステージで、それをバックネットと内野席から見下ろすという構図である。ステージと観客席の間を約20メートルの湖水が隔っている。観客席のスタンドは、約7,000人を収容できる。

湖上オペラは、水の上に設営したステージという限られた状況の中で行うため、1演目のみのオペラを連日演じる。ブレゲンツの湖上オペラは、毎年奇抜で巨大な大掛かりの装置が制作されてきたが、今回の演目はプッチーニの「蝶々

夫人」で、その舞台装置は極めてシンプルなものであった。簡単にいうと、山水画を描いた巨大な和紙を約20～30メートルの高さから吊るしたようなイメージである。低いところには、松の枝が広がり、背景は霞む山並みが、薄墨一色で描かれた水墨画という風情である。

私の目測では、おそらく幅50メートル、奥行き30メートルもある広いステージには、様々な出入り口が何段にも設営され、鮮やかな着物姿に傘をさした女性群衆、歌舞伎のメイクと衣装の男性群衆が出入りする。白い能面を被った10人の白装束の女性が、常に蝶々さんの周りを影のように寄り添い、死を看取るという演出は、極めて斬新で鮮烈な印象を残した。

休憩なしの3幕150分が、蝶々さんの自決とともに、ステージ下部から上方に向かって、めらめらと炎が燃えあがり天に上るというフィナーレの照明効果に、聴衆は熱狂した。私もそのような聴衆の一人として、拍手を送り続けた。

### ザルツブルク音楽祭

湖上オペラの感動の醒めやらぬ中、次の訪問地、ザルツブルクに向かう。アルプスの雄大な山並みを望みつつ、列車は東に進む。ブレゲンツを出発して約4時間半、列車はザルツブルク中央駅に到着する。ザルツブルクは人口15万人の古都で、中央駅から市内のめばしい所は、徒歩20分くらいで行けるコンパクトな街である。

ザルツブルクの滞在は3日間と短く、祝祭劇場で二晩、オペラとコンサートを聴いたのみである。一日目のオペラはプッチーニの「三部作 IL TRITICO」である。これは、3つの異なったオペラをまとめて上演するという、他に類を

見ないスタイルである。それぞれが1時間程度の短いオペラで、「外套」、「修道女アンジェリカ」、「ジャンニ・スキッキ」からなる。二日目は、ウィーンフィルが、サン・サーンスの「サムソンとデリラ」の第2幕、ワーグナーの「パルジファル」の第2幕をコンサート形式で上演した。ザルツブルクの最後の夜にワーグナーを聞いて、次のバイロイト音楽祭に向けて、気分が高揚した。

### バイロイト音楽祭

翌朝、他の仲間をザルツブルクに残し、私と渡久地氏の二人は、汽車に乗り込んだ。ミュンヘン、バンベルクと2回乗り換え、のどかな田園風景の中、約5時間でバイロイト中央駅に着く。バイロイトの人口は7万人余で、ザルツブルクの半分ほどの閑静な街である。

タクシーで5分も走れば、宿舎のホテル・ラインゴールド (Rheingold) へ着く。チェックインの時、私の名前を聞いて、すぐにフロントの女性が差し出した大型の封筒には、オペラのチケットと音楽祭のパンフレットが入っていた。これは、渡久地氏がドイツのネットを通して入手したプラチナチケットである。

リヒャルト・ワーグナーが自作のオペラを上演するために建てた祝祭劇場で行われるバイロイト音楽祭は、1876年(明治9年)に始まり、今日まで140年以上にわたって開催されてきた稀有な音楽祭である。

バイロイトで観たオペラは、「タンホイザー」と「さまよえるオランダ人」の2本である。タ

ンホイザーの演出には、大変驚いた。私は、伝統的な時代設定のオペラを期待していた。しかし、オーケストラが序曲を奏すと、いきなり、ステージ上部のスクリーンには、航空撮影のムービーで森の中を走る1台の車が現れた。運転する女性(ヴェーヌス)の隣に荒くれ風の男(タンホイザー)、後部座席には小人と背の高い黒人が乗っている。全く不意打ちを食らった私の頭の中は混乱し、ワーグナーの音楽が耳に入らなくなった。小人は、明らかに先天性骨軟骨異形成症の男であり、私は診断名をあれこれ考えていた。

3幕のオペラは2回の休憩を挟んで約5時間。少しずつ演出の意図が見えてきた。わかったことは、タンホイザーは警察に追われる罪人であること、彼の更生を祈り続けた恋人エリーザベトが、彼らの車を探し当てて自ら命を絶つまで、タンホイザーは魔性の女ヴェーヌスとの関係を絶つことができないダメ男である。エリーザベトの亡骸を抱いて、タンホイザーが泣き崩れるところでフィナーレとなる。ドイツの聴衆はスタンディング・オベーションで大歓声をあげ、拍手がいつまでも鳴り止まない。私の後ろの席は足を踏み鳴らし、椅子を叩くという熱狂ぶりであった。私はひとり呆然として、拍手をする気力もなかった。

世界のクラシック音楽祭の中で最高位に位置付けられるバイロイト音楽祭については、また別の機会にもう少し詳しく紹介したいと思います。

